

1月27日（木）

共同体的な自己・物語的な自己・カント的な主体

作成者：想田瑞恵

檜垣先生（以下H）：想田さんは「リバタリアンやロールズの言うような自己は弱い」と書いているけれど、これはどういう意味ですか？

想田（以下S）：個人の尊厳について考えたり、実践ということを意識するときには、リバタリアンが想定するような自己より、サンデルやコミュニタリアンの考える「共同体の一員としての自己」のほうが良いということです。リバタリアンの考える自己は恣意的で抽象的なものであるため、こうした問題について考えるときには、サンデルの考える自己よりも弱い、ということを意図していました。

H：そういうことなら、わかります。ただ、もっと突き詰めて考えるなら、「リバタリアンやロールズの言うような自己は弱い」というときの「弱い」とは、カントの言葉でいえば「欲望の奴隷」だということですね。自分の好きなように意志選択しているように思えても、環境など傾向性に支配されており、本来の意味での「主体」というものは出てきません。

S：そして、そうしたカント的な主体には、戦争責任はないのではないか、と考えました。リバタリアンのように、自己責任とは当事者としての責任のことだと考え「戦後世代には戦争責任は生じない」というのとは、別の次元の話として考えられないでしょうか。

増田さん（以下M）：カント的な主体には、戦争に関する道徳的責任はないだろう、という指摘ですね？けれど、道徳責任は個人に生じる責任なので、主体にも生じるのではという気がするのですが。

S：戦争責任は、共同体に所属していることが前提された自己に対して生じるものです。カント的な主体は必然であり、共同体のような偶然的なものとの関係はないと思います。なので、やはり、こうした主体は、戦争責任を負うことはないと思うのですが。

M：前回までの流れから、カントの言う道徳法則に向かう動きと、アリストテレスの言う不動の動者に向かう動きは同じなのでは、という話が出ました。同じことをしているならば、それをする自己も同じであると言えるのではないのでしょうか。

S：確かに、現れる行為は同じように「対話」という形かもしれませんが、ベクトルは違っているということだったと思います。責任を共同体に寄せて考えるものと、個人に寄せて考えるものというように。

M：ベクトルは確かに違っていますね。でも、もう一つ確認したこととして、戦争責任を要求する人は、道徳的責任まで含んだ責任を要求しているのであって、ニュートラルな主体ではなく、「共同体の一員としての個人」ということを強調しているという話がありました。それを踏まえると、中国人が日本人に謝罪を求めてきたとして、「政治的責任のみ果たします」というのでは、納得しないのではないのでしょうか。

S：リバタリアンのような自己ではないので、政治的責任だけでなく道徳的責任も果たせると思います。カント的な主体を示す表現の一つが「日本人」だった、とは考えられないのでしょうか。ある共同体に所属することが、ある共同体に依存することだとすれば、「共同体と関係はしており、それにより表現されることはあっても、決して共同体に依存はしない自己」というものが、なくてはならないと思います。

H：確かに、そういう意味でなら表現だと言えそうですし、そこを強調する理由もわかりました。ですが、絶対に人は何らかの共同体には所属しているわけなので、単なる表現ではなく、あえて言うなら不可欠の表現ということになるでしょう。「共同体の構成員ということが表現であり、共同体に依存しているわけではない」ということは認めます。けれど、依存していない自己といっても、内容がないわけではないでしょう。ここは解釈が分かれるところですが、僕は、道徳法則は単なる指標ではなく、きちんと内容を持つものだと考えています。確かに、一般的なコミュニタリアンのように「共同体の伝統に依存する」というのは、おかしいです。ただ「共同体は一つの表現だ」というのも、軽すぎる気がしますね。カントも、共同体における常識は重視しています。そうすると、実質的に違わなくなってしまうようですが、それでも、多数派に対して「それはおかしい」と言いやすいのはカントでしょう。ただし、サンデルの言い方もずいぶんこなれてきて「時代や状況によって変わる」と

いうことを言っていますからね。そうすると本当にやることは変わりがなくなってしまう。けれど、コミュニタリアンがそんな簡単に「時代や状況によって変わる」ということを認めていいのか、ということは疑問です。サンデル以外のコミュニタリアンは、もっと共同体の伝統に依存しているのでは、という気がします。僕のカント理解もかなりアクロバティックみたいだけど、サンデルの共同体理解も、コミュニタリアンとしては、かなりアクロバティックなのではないですかね。

S：確かに、カント的な主体に、道徳法則のように内容を持たせようとするなら、「共同体構成員の一人」ということは無視できません。そこを強調して共同体というものを考えているのだとすれば、サンデルとカントは似ているということに納得はできます。

H：そこが哲学の醍醐味でしょうね。同じに見えるけれど、本当にそうなのか、突き詰めて考える必要はあるでしょう。ともに、共同体の常識に依存していないということは、ポイントです。

M：議論するためには、自己は中性的なものではなく内容を持ったものでなければならない。なぜなら、それに依存はしないものの、自分の立ち位置が議論には必要だから、ということですか？

H：確かに少なくとも最初は立ち位置は必要です。ロールズも初期のころはカント的な主体を想定していたらしいけど、その論はなくなっちゃったんですね。それは、おそらくコミュニタリアンを意識して、実践に適用しやすくということ考えたのだろうけど、かえって批判される結果になってしまいました。リベラリズムに対抗するためには、形而上学的な自己を想定しないといけないでしょうね。けれど、自己とは空虚なものであってはいけないわけです。

S：そうですね。空虚で無内容な自己だと、「中立のリベラリストと同じことを言っている」と批判されてしまうでしょう。

H：神山さんは今までの流れから責任についてどう考えられましたか。

神山さん：道徳的という言葉の使い方に違いがあるのではないかと思います。責任を区別して、主体には道徳的責任がないと言うことは、「自分は悪くないけど責任はある」と言っているようで、矛盾に思えます。

S：「責任を区別することは矛盾である」ということですか？ どういう意味なのでしょう。

H：これまでの話の流れからの理解として、政治的責任は戦争そのものに対する責任ではなく、自分の政府の責任であり、道徳的責任というのは個人の責任である、という区別をしていました。ただし戦争責任が問われる場合、個人も何らかの責任を取ることが要求されているのではないかと、ということですね。

M：前にも書きましたが、「何らかの責任」とは何であるのか、僕個人はどういう責任を取ればいいのか分かりません。

S：私は「個人の責任」という言い方をしてきましたが、今考えるとあいまいな表現だったと思います。「個人」には様々なレベルがあることが確認されたわけですから。

H：この議論の最初では集团的責任と個人的責任という区別をしていましたが、コミュニタリアンはそういう区別をしないだろうから、言っても通じないだろう、という流れもありましたね。このあたりについては、色々な人が色々な議論を展開させています。例えばヤスパーズは「4つの責任」ということを言っていますね。

S：尊厳や道徳ということの問題にするときには、二つの方向性があるように思いました。リベタリアンの言う自己よりも高次にあるカント的な主体から道徳を論じる方向性。そして、種を共同体として、それより大きい類という概念から道徳を論じる方向性です。サンデルは直接は言っていないがそういうことになると思います。こうした区別は可能でしょうか。

H：すごく単純化すれば言えるかもしれないですね。大澤真幸の『「正義」を考える』ではどう言っていましたか。

石田さん：「自己の物語性の限界」というサンデル批判がありました。無縁社会という言葉に象徴されるように、現代においては共同体は崩壊しています。ならば、たとえサンデルのように目に見える範囲での共同体というものを重視しても、そうした共同体に意味はないだろう、というのが大澤さんの主張でした。けれど、意味がないといっても、自分が何らかの共同体に所属していることに変わり

はないわけですから、「自らの役割を考える」ことは、やはり大事だと思いますね。

H: 佐伯啓思の『自由とは何か―「自己責任論」から「理由なき殺人」まで』（講談社現代新書）がとても参考になりました。また大澤さんの本では、角田光代の『八日目の蟬』（中央公論新社）を例に、自己形成について上手いことを言っていました。自己決定や自己責任は自分のベースを肯定されて始めて踏み出せるものです。ところがこの小説の女の子は、父親と不倫関係にあり妊娠中絶した別の女性に誘拐され、彼女に愛されて育つという経験がベースなんです。やがてその女の子は生まれた家庭に戻るのですが、実の母親は憎い女とのつながりが我が子にあるのが許せず、そのベースをことごとく否定します。結果、その子は自己の確立ができず、家族だけでなく、自分を愛してくれていたはずの誘拐犯のことまで憎むようになります。養子縁組と事態はかなり似ていますね。この場合、従来なら、生みの親がベースを受け入れ、子どもの人生を物語としてつなぐことが大事だとされてきました。物語をつなぐことで、人間は自分を自分として確立できるわけです。このあたりは、芹沢俊介が『現代〈子ども〉暴力論〈増補版〉』（春秋社）で言っていた「イノセンスの壊れる時」ということと関連するでしょう。けれど大澤さんは、今の時代、物語を語ることは無理だろうと、物語を接続することをしないんです。『八日目の蟬』の女の子は、自身も不倫の末、身ごもってしまい、とても悩むんですね。そして、かつて誘拐犯だった女性と暮らした場所に足を運び、彼女に愛されていたことを思い出す。しかし、そのことを物語としてつなげることはせず、それはそれとして、自身は中絶せず産むという意志決定をするんです。蟬というのは七日の命であり、八日目からの命は付け足しのようにも思えます。けれどそうではなく、彼女にとっては、この意志決定をするまでが蟬における七日間であり、意志決定後の八日目からは付け足しではない新たな人生だということなんですね。それがタイトルの意味だろう、ということでした。サンデルなら、物語的自己が難しくなっているからこそ、頑張って取り戻せということをお願いするのでは。 「物語的自己をつなぐのではなく、新しい自己に向かっていく」という主張は、最初「おお!」と思ったんですが、どうなんですかね。そう上手いこといくものなののでしょうか。

M: 僕には共同体に所属しているという意識はありません。生きている以上、何らかの物語性はあるでしょうですが、共同体に支えられて自己があるという感じではないです。物語的自己というのは、共同体が抜けられないものとしてあったときに成立していたもの、という気がします。今は共同体から抜けられる自由がある。ならば物語的自己は難しいのではないのでしょうか。

H: 「共同体から抜けられるかどうか」というのはポイントですね。生まれつき頭が悪いとか暴力的な衝動があるということに対し、私に責任はありません。この私の性格に責任を持つことは、本来ならなくていいことなわけです。ところが人間とは不思議なもので、自分が選んだことではなく、ゆえに自己決定・自己責任ということでもないはずのことを、あたかも自分が選んだことのように見なす。それが大人になることです。共同体についても同じでしょう。これまでは、共同体から抜けられないからこそ、構成員である自分を引き受けることで自己が形成できた。「この共同体でなければ自分ではない」というようにです。増田さんの今の指摘は本当に重要ですね。気づかされました。つまり、共同体から抜けられず、自分が選んだのではないからこそ、引き受けたことが核になるということでしょう。「引き受ける」というのがポイントです。安心感を与える装置としての共同体がないため、共同体により確立できる自己もないということですね。栗原さんは、どのように考えましたか。

栗原さん: 共同体の縛りが弱いと役割が強制されることも少なくなるでしょうから、自分の好きなように生きたい僕にとっては、それならそれで、という気もします。

H: 宮台真司は「コミュニタリアンに趣旨換えしたんじゃないか」というコメントに対し、「共同体を自ら選ぶということで、リベラリズムの立場にある」ということを言っていましたね。ただ、確かに黙っていても役割を与えてくれるような共同体はなくなったかもしれませんが、家族を考えてみればわかるように、完全にビジネスライクな関係だけというのでもない。家族というのは、自分では選べない共同体です。そのため、たとえどんなにひどい親だとしても、その人との関係は実は自分を支えているのではないのでしょうか。家族との関係だけではなくならないだろうという気がしますから、共同体としての自己もあり続けるだろうと思います。

M: 物語的自己と共同体的な自己は同じものですか。

H: 新たな人生を選択しようとするのは、物語的自己とは違うと言えるでしょうし、物語的自己ということを出したのは、共同体主義の始まりともいえるマッキンタイアです。物語的自己と共同体的自己は同じといっても良いでしょう。単に従来の意味で「共同体」という言葉を使うなら、増田さ

んのおっしゃるとおり、今の時代、共同体的な自己は成り立たないでしょう。けれど「共同性」を家族や恋人に見出し、それを地域などに広げていくことは可能だと思いますし、家族が支える自己は意味を持つと思っています。経験的に言うてしまうのはよくないですが、家族の支えがないと自己は獲得しにくいということはある気がしますね。